

文法化した語・しなかつた語

笠間裕一郎

九州大学大学院

平安時代日本語(以下中古語とする。)においては、所謂助詞テが音便を惹起こす例が見られる様になる。

動詞における「助詞テ」による音便は、

- (1) a.所謂四段・ラ変動詞の内「未然形を除く活用形」の音節数が、全て同じになること(笠間裕一郎(2014b)) b.極性のみで助詞テと対立する屈折接尾辭、所謂打消の助動詞デ」が中古語において生じたこと(笠間裕一郎(2014a))

の二點より、子音始まりの語」であつた助詞テが、所謂子音語幹動詞の内部要素(ここでは接尾辭)となつた際に生じたと考へられる。

所で、中古語の所謂子音語幹動詞に音便を惹起こす物として「助詞テ」以外に、所謂助動詞メリ」「助動詞ナリ」が存在する。

奈良時代日本語(奈良方言)においては「助動詞メリ」の例はないが「助動詞ナリ」の例は存在する。これは音便を惹起こさずに、所謂終止形」に接續する。故に、中古語より見られる様になるこれ等による音便も「助詞テ」同様に、子音始まりの語」であつた助動詞ナリ」

「助動詞メリ」が、所謂子音語幹動詞の内部要素(ここでは接辭)となつた際に生じたと考へられる。

所が興味深いことに、これ等「助動詞ナリ」「助動詞メリ」が音便を惹起こすのは、

- (2) a.先行する語幹が、所謂「ラ變活用動詞」語幹であり、 b.かつ、所謂「ラ變活用動詞」語幹の内、動詞「ヲリ」の語幹ではない時、

つまり、先行する語幹が動詞「アリ」「ハベリ」「イマスガリ」の語幹の時に限られる。そして通時的には、動詞語幹に後續する助詞テは、完全に動詞の内部要素化するのに對して、「助動詞ナリ」「助動詞メリ」は動詞の内部要素化せずに、形式そのものが消滅する。

本発表では、この

- (3) a.動詞アリ」「ハベリ」「イマスガリ」の語幹に後續した際にのみ、なぜ助動詞ナリ」助動詞メリ」が動詞の内部要素化するのか
b.助動詞ナリ」「助動詞メリ」がなぜ助詞テ」の様に動詞の内部要素とならなかつたのかと言ふ問題に就て、
(4) a.先行する動詞語幹と助詞テ」「助動詞ナリ」「助動詞メリ」の意味的な呼應關係の違ひ b.中古語の動詞屈折パラダイムにおける助詞テ」&助動詞ナリ」「助動詞メリ」の占める位置の相違

と言ふ二つの觀點から、この問題に對する考察を行なふ。